

田峯城(蛇頭城)(北設楽郡設楽町田峯字城9)(田峯歴史の里)

田峯城は、田峯菅沼氏累代の本城で、文明2年(1470)定信が築城した、奥三河における代表的な山城です。遺構は残っているものの資料は極めて少ないため、他の中世城郭を参考に、物見台、本丸、大手門などと併せて、田峯歴史の里に再建されました。

麓に流れる寒狭川と、城をいただく山並みがまさに大蛇のようであることから、別称「蛇頭城(じやうがじょう)」とも呼ばれていたんだよ。御殿の上段の間であぐらをかけば、まさに殿様気分!物見台からの景色も、一国の主になった気分が味わえちゃいます♪

「奥三河観光ナビ」による

江戸幕府を築いた徳川家と奥三河の菅沼家の関わりは、戦国時代のはじめ、徳川家康の祖父、松平清康が三河地方を統一する頃からありました。その頃、設楽町近辺は交通の要塞の地であり、東は今川氏、北は武田氏、西は織田氏と戦国時代の大名がせめぎあっていました。

戦国時代、武田信玄が進軍してきたのも設楽町近辺であり、都への途上中、病に倒れた信玄が病没したと伝える墓石も設楽町に残されています。戦国時代の末期には、武田信玄の息子・武田勝頼が進軍して長篠で合戦が行われましたが、このときにも田峯城が大きな役割を果たしたのです。奥三河を領地とする菅沼氏も、徳川派と武田派に二分され、相争うことになりました。徳川派に付いた方の菅沼一族は、その後も存続し、旗本として幕末を迎えたのです。

菅沼氏が二分されたのは、弘治二年(1556)、当時の田峯城城主・菅沼定継がきっかけでした。今川氏から尾張の織田氏に寝返った定継は、今川氏から討伐を受けて敗北。当人は自刃、菅沼宗家滅亡の危機に立たされました。

この時三才であった定継の子・定忠は、叔父である菅沼定直らの努力により、新たに三河の支配者となつた徳川家康によって助けられたのです。ところが、成長した定忠と家老・城所道寿は、武田氏の調略に乗り、家康を裏切ってしまいます。こうして城主率いる武田派と、家康に恩義を感じる徳川派に分かれ、田峯城の惨劇を引き起こしてしまうのです。

天正三年(1575)、長篠の戦に敗れた武田軍とともに戻ってきた定忠と城所道寿は、留守居の定直や今泉道善らに入城を拒絶され、城を追われることになったのです。激怒した二人は自分たちが自害したと噂を流し、一年後の天正四年7月、復讐を果たします。十四日未明、まだ寝静まっている田峯城に斬り込み、老若男女幼少問わず皆殺しにしたのです。

天正十年(1582)、織田信長による征伐で武田氏は滅亡します。その後、菅沼定忠と城所道寿は徳川軍に帰参を願い出ましたが、当然認められずに誅殺。菅沼定直らによって救われた田峯菅沼宗家が、滅びた瞬間でした。田峯城に迎えられたのは、道目記城主、菅沼定利。終始徳川方として行動した定利は、定忠に殺された菅沼定直の嫡子でした。その後、定利は幕府に長年仕え、旗本となつたのです。現在、田峯城は復元されており、あたりには首塚や道善塚が残り、往時を彷彿とさせます。

「したらん♪トレイル」による

